

夏秋冬春 中村九郎

—夏—

丁寧な言葉で表すなら、そのひとはクズだった。

もちろん、僕だってそれなりのクズである。体育がサッカーだとわかればクラスメイトに調子を合わせ、はしゃぐふりをしたりとか。はしゃぎつつも比較的らくそうな、守備的なポジションをちやつかりと確保したりとか。ちよつとの接触で派手に転んでファールを獲得するばかりか、もう走れそうにないと退場したくせに、保健室にダッシュで駆け込んだりとか。

「いや、じつとして」

「え、ああ……」

そんなそれなりの、クズの僕のことだ。

養護教諭不在の保健室に居合わせた上級生の先輩に、看護などざれようものならである。

「きみの名前、略して夏彦って呼んでもいいかな？」

「ああ、うん」

「あたしは、三年の……」

親切な先輩の話など右から左、そんなことよりも制服の胸元のざつくり感だった。

「あたしが保健室の留守番をするに至った経緯ってさ、もう話したっけ？」

「タバコ一本で停学がどうのうるせーと、腹いせに何かしてやるって忍び込んだとか何とか」

「何それ、ちゃんとあたしの話を聞いてくれてる？」

聞いてはいたが正直、頭に入って来ないというかさ。

だって断然、見えるか見えないかの境界線の方が重要だったのである。

「あらあら夏彦ったら、一年坊主とはいえ中学生なんだから泣いちゃダメでしょ？」

認める、魔が差した。

消毒液がしみたふりをしたらどうなるかなんて、思いついたってやるべきじゃなかった。

(まさか、ふーふーしてくれるとは……)

だが、チャンス。

本当にいいのかつてくらい見えそうなのに、ぎりぎり見えないもどかしさつたららないな。

「夏彦、あたしたちが出会ったのって運命かもね」

「何、運命って言った？」

「だって今日って、七月七日だよ？」

「ああ、七夕……」

「何とかって男の子と何とかって女の子が、年に一度だけ会えるとか何とか」

「うろ覚えにも程があるでしょ、ヒコボシとオリヒメだ」

「そうそうヒコボシとオリヒメ、あ……」

不意に先輩が胸もとに手を当て、顔を上げた。

途端に全身を罪悪感みたいなものが駆けめぐったが、時すでに遅しとはこのことか。

「夏彦は、オキヒメ、って知ってる？」

セーフ、だけど一難去つてまた一難というのか。

うるさいほどの心臓の鼓動を早いとこ、何とかしないと聞けないのに――。

(このタイミングで、二度目のふーふーとはな)

もはや、覗きこんでごらんとばかりというかさ。

ひよつとして僕、何かしらの境地みたいなのに達しているんじゃないだろうか。無意識の世界で相手の話にてキトーな相づちを返しつづ、集中力のすべてを視覚に凝縮できるなんて。

「何だっけ先輩、オキヒメって言った？」

「うん、あのね。あたしも何となく耳にしたって程度の話だから、正確なことはよく知らないんだけどさ。夏彦だって、ネツトくらいするよね？」

「うん、するけど……」

「もしもの話、なんだけどね。『あたしが身につけている下着を、これからある場所に置くから見つけてね』みたいな、そんな書き込みの掲示板を見つけたらさ。夏彦、どうする？」

「ねえ、夏彦ならどうする？」

「身につけている下着をどこかに置いておきますなんて書き込み、僕ならそんなの……」

「そうだよ、夏彦なら一刻も早く現場へ駆けつけようとするよね」

「誰かつ、僕はそんなこと……」

「いいから聞いて夏彦、世の中には夏彦のことを玩ぼうとする連中もいる。夏彦より先に書き込みを見つけて、落ちてい

た軍手とすり替えたりとかね。そもそも書き込んだひと自体が、愉快犯の可能性もある。オキヒメのことサンタみたいだと思つたら、大間違いなんだから」

話の入り口は、美しき七夕伝説だつたはずである。

それがどうだ、気づけば真逆の下ネタっぽい雰囲気というか。中身の無い感じが半端じゃないというか。肉眼でやつと見えるつて定義された、六等星みたいな印象というかさ。

「夏彦つたらまた聞いてないでしょ、あたしに興味なさすぎなんじゃないの？」

そう言われたつて胸もとのざつくり感以外の、あなたのごに興味を持っていいのか。

「ねえ、夏彦つたら！」

「話ならちゃんと聞いている、オキヒメの正体が先輩つてことなら想像はつくし……」

「何それ違うしつ、何でそんなっちゃうの!？」

何でつて僕の理性の問題を棚に上げて言うのも何だが、先輩の話し方がへたくそだからだ。

それとも先輩が手品師のひとの、その類のひとつとか言うなら話は別である、

「あつたまあ、怒つたからね」

頬を膨らませてベッドに倒れ込む演技の、わざとらしさと

か。

先輩には何か別の目的があつて、僕の視線を反らそうとしているというなら見事だ。こうしている今だつて、無防備にうつ伏せになつた先輩の、スカートの裾が気になつて仕方がない――。

(何か、おかしくないか?)

違うな、何もかもおかしいんだ。

何だかんだ言いながら、僕の興味は先輩に持つていかれている。それも部分的にだ。現に例えば顔立ちの印象とか、そんな当然のものすら曖昧である。罪悪感とか、背徳感とかの境界線でもがくのに精一杯だつたせいだ。蜘蛛の巣に引っかかったのだとしたら、これでもかつてくらい無様な引っかかり方である。何しろ、逃げ出したいとも思わない。むしろこのまま溺れていたいんだ、先輩。蝶々の僕はもはや女郎蜘蛛の虜なのかなどとか、言うとても思つたか。

(二度目のふーふーはやりすぎだつたな、クズめ)

そういえば以前、耳にしたことがある。

このひとたちはほとんどの場合、我々の視線に気づいているんだとか何とか。

(からかわれていた、最初から?)

今この瞬間も、玩ばれている真つ最中つてことなのか?

そう考えたらずべて、合点がいくというか。

(だけどさすがの破壊力だな、うつつ伏せのひとの足下からの角度とか……)

踊らされている可能性に気づいてなお、踊り続けるしかないなんて！

見え隠れする、先輩の真の目的みたいなのを暴かなければならないのに、集中力は散漫だ。

「えーとその、先輩、ゴメン……謝るからさ、さっきの続きを話してよ」

「さっきの続きって何、あたしたち何の話をしてたっけ？」

「オリヒメだったか、それともオキヒメだったか……」

下品な話題の選択、それも僕のことをからかうための罠か何かだったのだろうか。

「先輩は結局、何の話がしたかったの？」

「だからあ、この街のオキヒメはオリヒメだって話でしょ」

「うん、え？」

「名前がさ、忘れちゃったけどオリヒメみたいな名前の子らしいの。それでオリヒメって呼ばれてただけど、誰かがオキヒメってからかって呼び始めて……そういうこと、あるでしょ」

「下着の話、だったんじゃない……」

「それはただの話の導入部分、あたしが話したかったのは別の話だよ。オリヒメ、そんな名前の子の話ね。ちよつと変わる子なんだってさ。変わってるから、オキヒメだとか言われてからかわれるようになって……一周したのか、からかわれたりとかそーゆうのはなくなっただけだ。ただ今ではもうほら、名前すら呼ばれずに無視されてるとか何とかって話よ」

堂々たる、先輩マジで何が言いたいんだよってレベルのへたくそな話し方である。

だがへたくそだからこそ、逆に耳をかたむけざるを得ないというか何というか。

「それであたし、思ったんだよね」

「思ったって、何をだよ」

「名前がなくなっただけなら、あたしが名前をつけてあげようかなーってさ」

「先輩が、オリヒメに？」

「新しい名前、ベガちゃんとか可愛くね？」

もしかしてフツーに、フツーの話だったのだろうか。

「夏彦にも新しい名前、つけてあげようか」

「僕に、なんで？」

「なんでって最初から何となくだけど寂しそうな顔してたで

しよ、秋彦」

「何でもいいけど先輩、ダメなドヤ顔してるからな」

「あら、あたしの名前いじりもタチ悪かった？」

「スベってるからとかじゃなくてその、もうすぐ僕はホントに秋彦になっちゃうからさ」

「それって親の再婚とかで、夏川って名字じゃなくなるってこと？」

「まあ、だいたいそんな感じというか……」

「努めて明るく言おうとしたつもりはないが、見透かされたのだろうか。」

「夏彦、暑いから泳ぎにでも行こっか」

「何だつての、また急に……」

「うちの学校ってプールがあるのに、授業で使わないのってもつたいないと思わない？」

「別に、恥ずかしながら僕カナツチだったりするしさ」

「何でもいいから職員室から鍵、盗ってきてよ」

「あんな、僕は先輩と違ってマジメな……」

「水着になって待ってるから、ほら早く行って来て」

「言われるまま職員室を目指して駆けだした理由、それはもちろん下心からだ。」

「だけどパツと見た感じの印象から、先輩のことを勝手に判

断しちゃっててゴメンって思いもあつたのである。言い訳するわけじゃないけどほら、開口一番の話題が話題だっただけにさ。

『夏川尋彦君、夜の学校で男女数人が不純異性交遊にいそしんでたつて噂をご存じ？』

あの時はうるせービツチとか思つて、聞こえないふりをしちゃつて本当にゴメン。

「だけど先輩は会つた時から、下品の親玉みたいなひとだったから——。」

『あたしたちは、花火がしたかっただけよ。火の気のない広い場所で作つた方がいいぞつて常識的な配慮から、学校のグラウンドを選んだの。ただ、誰かがね。立てこもり事件とかでお馴染みの、ピカッと光る何ちゃら弾みたいなの作り方をネットで見つけてさ。火薬は花火を分解すればある。あとマグネシウムがあれば、つて理科室にあるんじゃないか言い出して……』

案の定のボヤ騒ぎまでの、案の定すぎる展開は端折つても平気だろうか。

「これほど救いような話聞いたのは、生まれて初めてかもしれない。唯一、養護教諭のひとが校内に残っていたことは不幸中の幸いで——そういえば先輩、何て言つてたんだ

っけな。

『あたしが保健室の留守番をするに至った経緯ってさ、もう話したっけ？』

先輩の、顔を見るなりである。

何かに勘づいたのか、養護教諭は職員室の方へ駆けて行っただとか。この時間帯、職員室はほぼ無人なんだとか何とかって言ってたな。だけど謝罪に訪れたのに、没収物の奪還作戦を勘ぐられる先輩の信頼のなさって——なるほど実際、職員室にひとの気配はなかった。

(えーと、プールの鍵は……あっ！)

誰だよ、こんなとこにゴミ箱を放置したの。

物音に気づいたのか、奥の校長室から誰か出て来る。例の、養護教諭のひとだろうか。何て言うか決め打ちみたいに、吉田とか吉田奈津子とか怒鳴っている。

誰だそれと思いつつ逃走開始、今は何よりも——。

「水着、じゃなかった先輩！」

あれ、おかしいな。

急いで保健室へ戻って来たのに、何で先輩はいないんだ？

(それと何だか、職員室の方が騒がしいような……)

没収物の保管庫をやられたとか、賊はまだ近くにいますだみたいな声が聞こえてくる。

まさか、ひよっとして——。

(見え隠れしてた先輩の真の狙いみたいなのって、僕を利用した没収物の奪還作戦?)

先輩が保健室を訪れた理由、それは最初から、没収物の保管場所を探るためだったとか!?

養護教諭の態度から、目的のお宝は職員室だとわかったものの、この時間帯こそが千載一遇のチャンスだってことも判明する。おそらくこの機会を逃せば、向こうも以降は万全の警備態勢を整えるはずだ。やるなら職員室がほぼ無人の今だ、今しかないのだが——。

(職員室へ向かった養護教諭、やつを何とかする名案はないものか?)

そこへ、使えそうな僕が現れた。

だから先輩は速やかに作戦を立案し、実行に移して——考えすぎか、考えすぎだよな?

「嘘だよな先輩、かくれんぼなんてやめて出て来てくれって……」

中学一年の七夕の日、僕はけしてオリヒメじゃないひとに出会った。

そのひとを丁寧な言葉で表すなら、純粋な少年の僕を騙して囮に使うような、

「え、水着は……」

肉眼では見えないと定義された、六等星の光り方の、星屑みたいな、そんなひとだった。

——秋——

僕が塾通いを始めたのは、転校したばかりで友だちがいなかったからである。

「秋彦も塾に入れば、行き帰りとかで一緒に遊べるんじゃないかね？」

遊ぶために塾に入れたなんて、こいつらクズだなと思った。実際よりも二、三コマ多く授業がある。親にそう言えば、その分の授業料はお小遣いに変わるとか。帰りが遅くなったって言い訳せずに済むとか、次から次へと新しい裏技を思いつく自分の、仲間たち以上のクズっぷりには幻滅した。幻滅、そう我ながら幻滅したのである。

(レシートに付いているアンケートに答えるだけで、ドリンクバー無料券をゲット……だと?)

見落としていたって言うのか、一年以上のもの——、

「お待たせいたしました、以上でご注文の品はお揃いですか？」

「え、ああ……」

テーブルの上に並べられた一皿のからあげに、ふと我に返る。

塾帰りの密かな楽しみというよりは、むしろこの一時のための塾通いだ。

塾の向かいにあるファミレスの、窓側の席からの、お馴染みの風景のはずなのだが——。

(何だこの、物足り^{スカスカ}ない感じは)

仲間たちの不在、それが原因の一つであることは間違いない。

何で今日に限って皆、示し合わせたように塾に来なかったのだろうか。放課後、じゃあ塾でなつて別れたのに——いやそれは問題じゃないか、あの連中が無断でサボるのは今日が初めてのことじゃない。こうして一人きりってことだって、初めてってわけじゃないはずだが——。

(う、ん?)

目の錯覚、だろうか。

からあげは二百九十九円で、一皿五コだったはずである。

(一、二……)

三、四コだと!?

ちよつと待て、嘘だよな。もしかしてこの、剥がれ落ちた欠片みたいなやつを一コとしてカウントしろつてことなのか?

バカな、吹けばほら皿から消えるほどの儂さじゃないか!

(え、キレちゃおつかな……)

あのお、からあげが一コ足りないんですけど!

いやいやちよつと待て、店員のひとちよつと可愛くなかったか?

(どうする、もう食べちゃったんじゃないんですかみたいな目で見られたら……)

一コあたりに換算したら、およそ六十円の問題か。

たかが六十円か、されど六十円か——けどこの質(クオリティ)で六十円はお得だよな、つて待て!!

(おいおいおい、食べちゃつてどうする)

三コになつちやつたじゃないか、これじゃ二コも足りないつてことに——。

待てよ、二コも足りないならぶちキレたつて当然なんじゃないか?

(いやいっそ、もう一コ食べちゃうとかさ)

ちよつとそこの可愛い店員のひと、からあげがたつた二コしかないんですけど!

まだちよつと弱いか、これならどうだろうか。

(お皿の上からあげが一コ、ぼつんの図……)

これは、逆にありえないか?

一コならフツー店員のひと気づくというか、間違えようがないよな。

(何かないか、起死回生の一手みたいなの……だよな、あとできることは一コだけだよな)

おいマジか、この店は空つぽの皿を客に出すのかよ?

出すかよ、これじゃただの完食だ!

(そして美味かつたし……うん?)

こんな時間に、あんなマジメそうな子がファミレスに何の用だろうか。

たつたいま結んだばかりみたいな、きちつとしたポニーテールが印象的である。

(こつちに来る、何でだ?)

店内はほぼ借し切り状態、他に空席ならいくらでもあるというか。

喫煙席の方にはちらほらとお客の姿も見られるが、禁煙席側は僕しかいないのに——。

(やけにでっかい鞆、違うか鞆が大きいわけじゃないんだ) 小柄で華奢、重複するけれどとにかく細い^{ほっそ}というか。

七分丈のシャツから伸びた白い腕もさることながら、袖の下の二の腕の頼りなさったらないな。触れたら折れそうになっていうよりも、あんまり見ていたら悪いかなって感じにさえさせられる。それにしても、何で黙ってこつちを見て——。(見てるのはこつちじゃなくて、窓の外?)

この辺りは、予備校や学習塾のちよつとした激戦区である。最後の授業が終わる時間帯、この瞬間だけ見ると何て言うか集団門限破りみたいだ。実際は皆、足早に家路に就くのだが——迎えの車が来るまでの間はしゃぐ連中って、必ずいるよな。

(仲良さげな男女六人組だけど、着てる制服はみんな違うよな……)

同じ小学校だった、仲間とか?

この子も同じ小学校を卒業したのだ、だが——みたいな?

「ち、違ふし……」

何も言っていないのに、女の子は咳くように何事か弁解を始めた。

「私はあの輪の中に入れないんじゃないやなくて、入らないだけだし……私がここにいるって気づかれたら、困るから……あのひとたちに見つかったら困るから、ここに座っても平気?」

「え、ああ……」

仲間はずれの女の子を仲間はずれにする、そんなことできるだろうか。

かわいそうに、教室で独りぼっちだった姿が目には浮かぶ。(誰とも同じ中学に行きたくなかったから、がんばって受験しました的な?)

じろじろ見ていると女の子は、鞆を抱いて胸の辺りを隠してしまつた。

違ふか、何か取り出そうとしただけのようである。

「大きな本だな、何だそれ?」

思わず訊ねてしまつた、金属製の装飾に彩られた皮革つぽい表紙が見事だつたからである。

塾の教材用テキストとか、そういうのとは真逆の存在感と
いうか。

「何だか、ただならぬ雰囲気って感じがするんだが……」

「これは写本、写本っていうのは手書きで複製された本とか文書とか」

「手書きで複製って何でまた、もしかして年代物の……」

「これは私の写本、私がこの手で書き写したもの」

会話が噛み合わないっていうか、うん?

「表紙のその文字、それってアルファベットだよな……」

なぜだろうか、それは名前だと思つた。

きつとこの子のあだ名か何かだと思っただから、僕はほとんど決めつけて言ったのである。

「ベガ、ベガって呼んで構わないか？」

「これは私の名前ってわけじゃないけど、私のことベガって呼んだって平気だよ」

手とか頭とかだけじゃなくて、顔のパーツのひとつひとつまで細密なつくりというか。

きれいな歯ならびだなとか、一度にたくさんさんの感心をさせられた。

ほんの一瞬の笑顔、それだけだったのに――。

「あのひとたち、行っちゃったみたいだね」

「え、ああ……」

拍子抜けというか、肩すかしと言うのか。

ベガはせっかく取り出した本を鞆に戻すと、「じゃあね」と立ち上がって踵を返した。

（ほとんど子どもの、後ろ姿っていうか……？）

メールだ、誰からだろうか。

塾をサボった仲間の、その内の一人からだった。

（台風直撃、塾に行かなくて正解……）

台風、直撃？

いつもはいつまでもってくらい渋滞しているのに、なるほ

ど誰もが早めに退散するわけだ。

「ちよ、これ……」

すぐ目の前の街路樹はいつからか、巨大マグロがヒットした釣り竿みたいになっっている。

途方に暮れていると、帰ったはずのベガが戻って来た。

「超、暴風雨……」

きちんとした印象を与えたポニーテールはどこへ、ほぼ落ち武者の仕上がりである。

「もう秋なのに、台風とか」

「え、ああ……衣替えまで一週間あるし、まだそういう季節なんじゃないか？」

ベガは僕の正面に着席しながら髪留めをほどいて口にくわ

え、髪を結び直し始めた。

「歩いて帰るの、今日は無理かな」

「悪いこと言わないから、親にでも電話して迎えに来てもらえ、時間も時間なんだからさ」

「わかった親にメールする、電話はダメだから……」

間をもたせる自信がないから言ったのに、困ったな。

ベガの着ているえんじ色のブレザー、これって確か――。

「その制服、聖華女子のだよな」

「うん、そっただけ……」

「親戚の姉ちゃんが高等部に通ってるんだけど、ベガって頭いいんだな」

「別に、そんなこと……」

話つて、こんなに広がらないものだっただろうか。

「えーと、さっきの連中はベガの小学校の同級生か何かか？」

「あ、あのひとたちは……」

「いや上級生か、あいつら僕と同じくらいだったもんな。上級生のくせに、下級生のベガのことをいじめてたつてわけか。まったくけしからんっていうか、何ていうか……」

「あなた、三年生のひと？」

「え、違うけど……」

何だこの、間みたいなの。

「もしかしてベガ、僕と同じ中二……」

「同い年なのに見た目で勝手に年下扱いされるとか、生まれ初めてなんてだけ……」

口ぶりからして小学生扱いされなかっただけマシって感じだが、実際どうなんだろうな。

「冗談なのかどうかかわかりにくい無表情、ここは無難に謝っておくか。」

「ごめん悪かった、おごるから泣くのだけは勘弁し……」

「これくらいのこと泣いたりするわけなのに、逆に何だ

かごめんね」

安全策が裏目になってやつか、ベガが押す呼び鈴の音が店内に響き渡った。

ほどなくしてさっきの店員のひとがやって来たが、ベガはメニューを開いたばかりである。

「あのなベガ、こういう時は何を頼むか決めてから店員のひとを呼んだ方が……」

「だいたい決まってる、このページのここからここまで」

「セレブの買い物みたいな注文やめる、僕の感じから財布の中身なんて想像つくだろう」

「じゃあ、お水だけで平気だけど……」

「同情は結構だから、ドーンと五百円以内からあげでも頼めって」

「からあげだけしか頼めないみたいなんですけど、それつてお店的に大丈夫なことですか？」

「うるせーな、誰の心配してくれてんだ」

「想像するだけでも物足りないな、たつたの四コ入りか」

「あのな、おごられるくせに文句を……」

うん、今なんて？

こないだまで五コで二百九十九円だったはずなのに、驚愕の事実である。

四コで二百七十九円、秋のリニューアルに伴う新価格か！
（危なかった、こっちの勘違いでぶちギしるとか恥ずかしすぎるし……）

九死に一生つてやつか、ちよつと違うか。

「ねえ、ホントに四コしか頼んじやダメ？」

「うるせーな、わかったから僕のも注文してくれ」

「わかった、何が？」

「僕のを半分あげるから、僕のも一緒に頼んでくれつて言つてるんだよ」

「予算を大幅にオーバーするけど、平気？」

「舐めんな、本気を出せばもうちよつとくらい行けるつての」

「じゃあ私とこのひとのと予算のとで、合わせて十二コお願いしても店員のひとは平気？」

予備の、つて何だ。

そして最初に頼んで完食済みのからあげと合わせて、千円の大台を突破するつてどうよ。

「ま、いつか」

「べが、それは僕の台詞だからな」

「私の親が迎えに来るの、仕事の残業が終わつてからになるつて話だけど？」

携帯の画面をちらつと見せて、それからべがはあのバカで

かい本を再び取り出した。

予想外なことに、べがの方からさつき続きを話し始める。

「ギガス写本、知つてる？」

「ギガス、何かそいつ強そうだな」

「中世期の、現存する最大の写本だとか何とか」

「最大つて、どのくらいでかいつての？」

「高さ九十二センチの幅五十七センチ、厚さは二十二センチで重さ七十五キロ」

「本だつて言つてんのにバカでつかすぎだろ、マジかそれ」

そんなのに比べたら、べがのなんて小さい方である。

「ギガス写本の伝説、知つてる？」

「中世における最強の鈍器だつたのだとか、そういう類の話か？」

「ううん、ぜんぜん。誓いを破つて監禁された、修道僧のひとがね。厳しい刑罰に、耐えるために誓つたの。修道院を永遠に称え、すべての人類の知識を集めるべく写本をするぞつて」

「それはまた、スケールまでバカでかい話だな」

「それもたつた、一晚でだからね」

「え、無謀じゃね？」

「うん、真夜中ごろになつて誓いを守れそうにないなつて

気づくの」

「だろうな、つーかもっと早く気づけて話だ」

「そのひとはやむなく神様じゃなくて、墮天使ルシファーに語りかけちゃったんだ」

「おいおいおい、何やってんの?」

「悪魔よ本を完成させてくれ、私の魂と引き替えに……契約成立、悪魔は写本を完成させてくれた。修道僧は感謝の意を表すために、写本に悪魔の絵を追加したんだって」

このことだな、言葉にならないってのは――。

「今夜は私、誰の名前を書こうかな」

見開き右半分の空白に、ベガは何だか気が重そうである。

露骨に覗き込むのは失礼かと思つたが、嫌がるでもないようので身を乗り出してみた。何だろうか、左半分のページ。小さな字でびっしりと書き込んである、ひとの名前のようだ。

名前の隣に細かく記されている数字は、日付だろうか。

「これは私が出会った、一生に一度だけのひとたちの名前……」

「一生に一度、何だそれ」

「小学校の頃に一回も同じクラスにならなくて、だけど委員会の活動とかで一度だけ話したひととか。旅行先で立ち寄ったコンビニの、店員のひととかの名前」

「一生に一度しか出会わなかった、そしてもう二度と出会うことのないひとの名前……」

何かそれ、おかしくないか?

「あかさ、何かのはずみで偶然ばったり再会とかしたら……」
「そうならないようにするの、さもないと契約違反でたいへんなことになるから」

「契約って誰との、まさか悪魔とのだとも言うのか?」

おい、何か言え。

いやちよつと待て、何でそんなにじつと見てくるんだよ。

「あなたの、お名前は?」

「僕は秋山尋彦、友だちには略して秋彦って呼ばれて……ちよ、何で僕の名前を書くんだ?」

「だって秋彦とはこれつきり、二度と会うことはないだろうから」

同感、望むところだと思つた。

「だけどベガの、ペンを動かしていた手が止まる。」

「秋山尋彦、嘘でしょ」

「嘘じゃないって、ちよつと前に名字が変わったけど僕は確かに……」

「この世に生を受けてから、最初にもらった名前は?」

無表情の、静かな瞳にちよつとだけどゾツとなった。

この話、あんまりしたくないんだけどな。

「子どもの頃に僕の両親、交通事故で死んじゃったんだ。それからはほら、親戚中をたらい回しにっつての？ 一年とちよつと前かな、ずつとよくしてくれてたひとが亡くなって……」

「それで今は、秋山さんが保護者？」

「そういうこと、聖華の高等部に通つてる美人の親戚がいたから幸運ラッキーみたいな」

「名前、最初の名前は？」

「その名前じゃないと、ダメなのかよ」

「別に平気、だけど私ほら何となくそれは本当の名前じゃないなってわかっちゃったからね」

同情っぽい含みがないのはありがたいが、無表情すぎやしないだろうか。

ガラスが割れるんじゃないかってくらいひひとときわ強い風が窓を叩いた。それでもベガの表情は、微動だにしないかたりする。それがちよつと可笑しくて、半笑いで言つたんだ。

「珍しい名字なだけども、僕の最初の名前は鹿火屋……」

その瞬間、ベガの表情が一変した。

この鋭い視線つて、もしかして殺意とかそういうのじゃ

「あ、ある、ちゃんのこと知つてるでしょ、鹿火屋君」

気のせいかベガの声、震えている？

「驚おどろ沢ある、知つてるよね」

「アルルつて何だそれ、ハーフか何かか？」

「有瑠とかある有瑠みたいな、そんな漢字だつたような」

「口で言われたつてわかんないけど、それつて俗に言うところのキラキラネ……」

「ある、アルタイルの星の下に生まれたつてわかりやすい名前。あるいはアルタイルの星に見つけてもらい易いように、それだけの願いのためにつけられた名前」

弱つた、耐えがたい空気が。

「関係ないんだけどさベガ、からあげ遅くね？」

「私は何度も聞いたんだ。あるるちゃんが話すのは鹿火屋君のことばかりだった」

「そうか、意地でも話題は変えてくれないつてわけだな」

「あるるちゃんと鹿火屋君は子どもの頃、一緒だった。だけど事故にあつて、ううん。その事故も、悪魔の仕業だったのかも……二人とも子どもだったから何も知らずに、写本お互いの名前を書いちゃつたのかな。二度と会つちゃダメなのに、再会してしまつたから事故か？ だけど、鹿火屋君は生きてた。悪魔と契約して生き残つたなら、鹿火屋君も写本を持つてる？」

「ベガ、あのな……」

「命を助けてもらう代わりに毎日一人の、一生に一度しか会えないひとの名前を写本に……」

「あのなベガ、何て言われたって知らねーとしか言えないんだよ！」

強く言うつもりはなかったから、自分で自分の声量に驚いた。

幸いなことに、ベガの勢いはそげたようだが――。

「知らないとしたか、言えない？」

「ああ、僕は……」

「鹿火屋君もあるちゃんともう一度、会いたいって願ってるから？」

「え、うん？」

「お互いに願っているから、偶然に再会しちゃうかもしれないけど……その時、まったく覚えてないふりができればセーフ。悪魔を騙すことができれば、完璧に忘れたふりができたら……」

「忘れたふりとかそういうんじゃないくて、事故の後遺症っていうか記憶喪失っていうかさ」

たぶんこれ、伝わってないな。

あとそのオレンジジュース、僕のだからな。

「鹿火屋君、忘れたふり上手」

「だから、もお……それでいいけどさ、その目だけはやめてくれ。その上手な忘れたふりのやり方を教えてくれないみたいな、尊敬の眼差しみたいなのはマジでよせ……!?」

おかしいのは僕の目の方か、それともこの世界が僕思っている世界とは違ったのか？

「ベガ、お……」

言葉に詰まる、苦しいくらいに。

「鹿火屋君の名前、私は写本に書いたからね」

「待てベガ、それどころじゃな……」

「これでもう次に会った、その時はさよな……あ♪」

無表情と可愛い顔の、高低差とか。

無理もないか、こんなのあんまりだよな。

(悪魔がいるとしたら、こいつがそうだ)

我が目を疑うとは、まさにこのことである。

厨房の奥から現れたのは、さっきのちよつと可愛い店員の

ひとだ。

ただ、信じがたい姿をしているというか。

ファミレスの店員のひとたちの、たくさんのお皿を一度に運ぶ姿に、僕は感心しかしたことがなかった。だが、それら

すべてのお皿からあげが乗っていたとしたらどうよ。

(異様、そして雄弁……)

説明、そんなの必要だろうか。

一二三つて数を確認するまでもない、お皿はち、や、んと十二枚あるからすつこんでろ。いや待て、逃がすもんか。さつきから何てキレるか考えてるから、もうちょっとだけ待つてくれ。

「ご注文の品、以上でお揃いでしょうか？」

「オツケーサンキューとか言うんでも思ったか、何だこれ。ドラゴンボール多めに見つけちゃった、みたいな。願いを叶えてくれる童がいたとして、逆に出づらいつての。七つでいいんだよ、いやそれでも多すぎんだよ。僕のこと見えてるか、僕らのことどう見えてる？」

「どうつて中学生の、彼氏彼女とか？」

「彼女は可愛いのに彼氏は、みたいな目で見るなつての。この子は彼女じゃないし、いや彼女でも何でもいいからこの子にもつと注目してくれ。どうよ、見てて何か気づかないか？」

「え、マジ可愛いけど？」

「うるせーな、そこじゃねーつて言つてんだろ」

「じゃあ、ちょい痩せ気味？」

「うん、だけど育ち盛りだから十二人前とか余裕かもな。僕も

いるし、もしかしたら食べられるかもね。だけどこんなバカみたいな注文するかな、パスタもある。ドリアもサラダもあるのに、何だこれ。恐怖、マニュアル社会の弊害じゃね？

最悪、大きめの皿にまとめて盛つて持つて来てくれつての。

十二枚の皿に四コずつだけ乗せられたからあげ、これ何の儀式？」

「マニュアルがとおっしゃられますが、マニュアルですし……」

「だつたらマニュアル通り注文の確認をしてくれてたら、起こらなかつた悲劇じゃねーの!？」

違うな、言い過ぎた。

名札を確認し、非礼を詫びる。

「佐藤亜希子さん、あなただけを責めるつもりはないんだ」

じゃーあと誰の責任なのつて顔でベガ、からあげをパクついている場合か。

そもそもベガの、十二コつていう配慮のない注文の仕方のせいだからとか。注文した以外は下げてくださいとか。そんなこんなバタバタやつている内に、ずいぶん時間が経つていた。

「鹿火屋君、近くまで迎えが来たみたいだから……」

「そうか、つてちょっと待つてベガ」

「うん？」

「ベガの写本に僕の名前、ホントに書きちゃったのか？」

「書いたよ、鹿火屋尋彦君」

「じゃあ次に僕とあった時はその、ベガは……」

「うん、死んじゃうね」

「僕にできるの、二度と会わないように気をつけるっくら
いだってわかってるか？」

「わかってるけど、鹿火屋君ならって気がしたから……」

写本を鞆にしまいながら、ベガは言った。

「私がこの本の所有者になったのは、小学校を卒業する頃だ
った。通い慣れた図書室で、見慣れない本を見つけたの。そ
の本の最初のページにはなぜか、私のクラス全員の名前が書
いてあったんだ。だけどそこには、私の名前だけなくて……
クラスの皆の名前の側には、百前後の数字が記されていた。
不思議なことにその数字は、見る度に減っちゃってたの」

「ひとと出会った数の分だけ数字は減って、それがゼロにな
ったら……」

「悪魔の悪戯、死のカウントダウン。強制参加の、意地悪なゲ
ーム。途方に暮れて立ち尽くす私に教えてくれたの、図書委
員の女の子がね。それがあるるちゃんだった。あるるちゃん
は私に、見なかったことにして写本を自分に預けるって言っ

た。いいのかなって言ったら、いいんだよって。だけど既に
その時あるるちゃんは、写本アルタイルの所有者だったから
……」

「あるるは二人分のノルマみたいなのに、悪戦苦闘し始め
た？」

「見てられなくて、やっぱり私が写本ベガの所有者になるこ
とにしたの。そうしたらあるるちゃんはすぐ怒って、ケン
力になって……だから私、あるるちゃんの名前を写本に書い
たの」

「あるるを助けるために、あるるを写本ベガから遠ざけるた
めに……」

「可能なら二度と会いたくないひとの名前を書きたいのに、
なぜか逆になっちゃうんだよね」

「さっきの同級生たちの輪の中に、入らないんじゃないかって入
れない理由ってのはまさか……」

へたくそ、そう思った。

ベガの笑い方、それとそんな子に対する僕の声のかけ方に
である。

「僕とは別に、もう会いたくもないだろ」

「ううん、また会えた時に私が死ななかつたら……えーと、何
て言えばいいのかな」

「これ、もう一度あるるに会えるかどうかって実験か何かのつもりか？」

「あるるちゃんかね、言ってたんだ。鹿火屋君は悪魔になんて負けないんだって、だから自分も負けないんだって……鹿火屋君に会えて嬉しかった、また会えたらきつともっと嬉しいね」

ベガは小柄で華奢なのに、台風みたいだった。

過ぎ去ってしまわないことには、何がどうなるのかわかりようがないところとか。

「じゃあね、鹿火屋君」

「え、ああ……」

ベガを見送って、しばらくしてから僕もファミレスを後にした。

台風は進路を変えたのか、雲間に星々の瞬きが見える。

（雲は嘘みたいに急ぎ足で流れて、街路樹の枝は苦しそうに軋んだまま……）

街灯の光に引き延ばされた僕の細長い影は、ガードレールの向こうまで伸びていた。

やがてそいつは、左手を掲げて言ったのである。

「写本、カストール……」

するとどこからともなく、大きな本の影が出現した。

辺りに吹き荒れる風とは無関係に、勢いよくページがめくられる。

終わるまであと少しを残して止まったページの、半分以上ある空白に気が遠くなった。

（さっきの店員の名前、佐藤亜希子だったよな）

このページの、最初の名前は去年の夏頃のものである。

（誰だったっけな、吉田奈津子）

前の中学の、保健室で会った先輩の名前？

（そうだ、ベガのことを話していた先輩だ）

先輩、ベガに会って本当に名前をあげたのか。

ベガはその名前を大切にしているって、先輩に教えてあげたいけどな。

（二度と会っちゃダメって言われると、あんなクズの先輩も懐かしいというか）

ダメだろ、もう一度だけでも会いたいとか。

こんな風に思っている状態で再び会ったりしたら、知らないふりなんて——。

（知らないふりができなかった、その時は……）

ベガとの再会を避けてあげないと、だってベガは生きてあると再会したいんだ。

僕と同じか、それ以上に——。

続きは冬コミ頒布の灰メガ02にて掲載！